古代エジプトの「死者への書簡」における死者

内田 杉彦*

ABSTRACT Sugihiko UCHIDA, *The Dead in Ancient Egyptian 'Letters to the Dead'*: Ancient Egyptian 'Letters to the Dead', addressed to the deceased by the member of the bereaved family, are very important materials showing the image that Ancient Egyptians called up concerning the dead.

The aim of this paper is to show such an image of the dead, considering the character of the dead in the letters to the dead which belong to the period from the Sixth to the Twentieth Dynasty.

The letter was written mostly for asking the addressee, the deceased, to help the member of the bereaved family, including the addresser, being suffered from some trouble, containing sickness, nightmare, and the evil act by the other living person. These troubles, even the acts of the living, were attributed to the malice of the evil dead, and the addressees were asked to fight, or to report to the court in the Nether-world against the evil dead. In some letters, the addresser even half-threatened the addressee with the stop of the funerary service in order to make him/her help his/her family on the earth.

The addressee could also be regarded as the culprit being responsible of the trouble of his/her bereaved family. In that case, the addressee was blamed, and even threatened by the addresser.

In any case, the dead in 'Letters to the Dead', including the addressee, were used one-sidedly by the living to explain various troubles on the earth, or to acquire their solutions or compensations.

I

古代エジプト人にとって、死とは第2の生の始まりであり、現世と来世、生者と死者を隔てるものは、ある意味では、現世における地理的な隔たりの如きものであったように思われる。死者の遺族が、あたかも遠方の知人に書き送る

* 早稲田大学大学院文学研究科西洋史専攻博士後期課程

かのように、死者に宛てた書簡をしたため、それを死者の墳墓に置いていたという事実は、⁽¹⁾そのような生者と死者の関係を良く示している。

これらのいわゆる「死者への書簡」は、生者から死者に対し直接行なわれた呼びかけであり、当時の人々が死者に対して抱いていたイメージを最も良く示す資料として重要な意味を持っていると言えるであろう。現在までに、パピルスや供物容器などに記されたこの種の書簡が第6王朝時代のものから第20王朝時代に属するものまで、14通出版され、個別に研究されており、⁽²⁾「死者への書簡」の一般的性格と、それが伝える死者のイメージに関する主な考察としては、⁽³⁾ガーディナー (A. H. Gardiner)、ゼーテ (K. Sethe) の共同研究と、⁽⁴⁾ギルモ (M. Guilmot) による研究がある。⁽⁵⁾

しかし、すでに出版された14通の書簡すべてを踏まえ「死者への書簡」を論じた研究は、現在のところ刊行されていない。ガーディナー、ゼーテの研究は、彼らの出版した7通のみを対象としており、その解釈、翻訳には、再検討を要する問題点が多く含まれている。⁽⁶⁾また、ギルモの研究にしても、7通を扱っているにすぎず、⁽⁷⁾他の研究者、特にガーディナー、ゼーテの解釈について充分な検討を行っていない点などに問題がある。⁽⁸⁾

それゆえ本稿では、現在までに出版された「死者への書簡」を対象に、それらの書かれた目的と内容とを必要に応じて検討し、その中に表わされた死者の姿、当時の人々が死者に対して抱いていたイメージの一端について論じたいと思う。

II

「死者への書簡」は、1通を除き、⁽⁹⁾すべて、亡き近親者に何事かを依頼するために書かれている。その内容としては、一般的な意味での加護を望んだと思われるものや書簡の筆者の妻と姉妹に男子が生まれるよう助力を依頼したもの⁽¹⁰⁾などが⁽¹¹⁾見られるが、むしろ、筆者が、自分もしくは自分の家族の直面した特定の困難について、亡き近親者に訴え、その助けを求めたものが大部分を占める。そして、そのような困難は、おおむね第三者の影響によるものとされ、死者は、その第三者から、困難に直面した生者を守るよう求められている。

たとえば第1中間期の官吏、ヘニ (Hni) が、その亡き父親メルウ (Mrw) に宛てた書簡には、次のように記されている。

「お助けください、どうか何度も。あなたのジェット従者、セニ (Sni) が行な

っているこのこと、すなわち、私に、夢の中で、彼があなた〔と共に〕唯一の町にいるのを見せることに関して、あなたの世話をする者を助けてくださることは有益でしょう。彼の性格こそが、彼を罰しているのです。彼に起こった事が起こったのは、私のせいではありません。それは、すべての起こるであろう事柄の終わりではありません。〔彼の〕苦しみは、私の責任ではありません。他人が、私の面前で行動したのです。彼の……⁽¹⁴⁾守護をお与えください。彼が損害を与えませんように。彼がもう2度と私を見ることのなくなるまで、彼が妨害⁽¹⁵⁾されますように。」

ここでは、悪夢を見たヘニが、それについて責任のある亡夫の従者、セニの悪意から自分を守ってくれるように亡父に依頼しており、文面には、このセニが、ヘニの身近で何らかの不運に見舞われ、それゆえにヘニを恨んでいると考えられていたことが示されている。ヘニが悪夢を見たとき、セニが生きていたかどうかは明確でないが、ヘニの悪夢の中で「唯一の町」すなわち来世⁽¹⁶⁾に、ヘニの亡父、メルウと共に登場する「彼」が、もしセニを指しているとすれば、セニは、すでに死んでいた可能性が強い。いずれにせよ、ここでは、セニが実際にヘニを苦しめたというより、むしろヘニの苦難の責任がセニに帰せられていると言えるであろう。

また、前述の、男子の誕生に関する依頼の記された書簡には、筆者の妻のセニ (Sny) に関して、次のような記述が見られる。

「そして、あの2人、セニを苦しめた女中たち、ネフル・チェネテト (Nfr-tntt), イチャイ ('It3i) については、彼らを混乱させ (?) てください。私の妻⁽¹⁸⁾に向けられたあらゆる苦しみを、私のために取り除いてください。」

ここに記された2人の女中が死者であるかどうか、また、どのように書き手の妻を苦しめたのかは、文面からは判然としない。しかし、ここでも、前述のヘニの書簡と同様、彼女たちが実際に行なった行為が言及されているのではなく、直接には無関係と思われるような事件が彼女たちの責任とされている可能性が強い。なぜなら、彼女たちが女主人を苦しめるような事を実際に行なったのなら、彼女たちは現世で容易に罰せられ得るはずであり、ここで死者に助けを求める必要があるとは思えないからである。

病氣もまた、しばしば第三者の責任とされている。未亡人のデディ (Ddi) が、亡き夫のイン・イト・フ ('In-it-f) に宛てた第12王朝初期の書簡には、病氣の女中、イミイウ ('Imyw) について、次のように記されている。

「その病気の女中、イミイウについては、いったいどうしたのですか。⁽¹⁹⁾あなたは、彼女に害をなすあらゆる男、彼女に害をなすあらゆる女に対して、日夜、彼女のために戦うことができないのですか。⁽²⁰⁾なぜ、あなたは、あなたの家が滅ぶのを望むのですか。彼女の家が確固たるものとなり、⁽²¹⁾＜供養の＞水があなたのために注がれるように、彼女のため、今日、新たに戦ってください。もし、あなたから何も＜助けが＞なければ、あなたの家は破壊されます。あなたは、人々のうちで（？）この女中こそが、あなたの家を成り立たせているという事実⁽²²⁾に気がつかないのですか。〔彼女〕のために戦ってください。彼女を見守ってください。彼女に害をなすあらゆる男女から彼女を救ってください。」⁽²³⁾

ここでは、女中の病気をひき起こす者として、「彼女に害をなすあらゆる男女」が示されており、書簡を受け取った死者は、彼らと戦い、彼らの手から病気の生者を救うように依頼されている。この「あらゆる男女」の中に生者が含まれるかどうかは、この文面からは明確でないが、少なくとも死者が含まれることは、第1中間期に、亡き夫、テティ・セネブ (Tty-snb) に宛ててその未亡人が記した次の書簡により推察できる。

「ヘテブ・ネブ・イ (Htp-nb-i) の息子、テティ・セネブ宛ての書簡。あなたには、これらの嘆き⁽²⁵⁾がわかっていないのですか。⁽²⁶⁾あなたがた2人は、そこに⁽²⁷⁾いて、あなたは、そこでは、ご自分のことについてだけ、賢明でいらっしゃるのです。⁽²⁸⁾あなたの子供を治してください。この死んだ男や女をしっかりと捕えてください。彼ら2人が、彼の災難を眺めることがありませんように。ここには、⁽²⁹⁾あなたがた2人⁽²⁷⁾に対し逆らう者はいないので⁽³⁰⁾すから。」

この書簡では、亡夫の遺児の病気の原因として、「この死んだ男や女」、すなわち他の死者が挙げられており、書簡の受信人である死者は、そのような悪意を持つ死者たちを防ぐよう依頼されている。

このような、生者の苦痛が死者によってひき起こされるとする考え方は、同じく第1中間期に比定される書簡の中で、未亡人が亡き夫に宛てて記した次の文面にも見出せる。

「＜どうか＞大いなるお助けを。私の娘に対して非常に不当に行なわれているこのこと⁽¹³⁾に関して、あなたの世話をする者を助けてくださることは、有益でしよう。私は、彼に対して、何も＜悪いことを＞せず、彼の財産を浪費することもなかったのです。彼が私の娘に何かを与えくねばならなかつたことはありません。人が死者の魂のために供物をささげるのは、生者への助けを得るた

めなのです。⁽³²⁾ 私たちの苦痛をひき起こす何者であろうとも、⁽³³⁾ 罰してください。
なぜなら、私は、このように私の娘に対して行動するいかなる死んだ男、死んだ女に対しても、⁽³⁴⁾ 正しいからです。」

ここでは、未亡人の娘の苦痛、おそらく病気をひき起こした責任者は、⁽³⁵⁾ 直接には、ただ漠然と「彼」として示されているにすぎない。この「彼」が、未亡人とその夫にとって既知の人物であったのか、あるいは不特定の人物を指しているのかは明確でないが、少なくとも、⁽³⁶⁾ 彼は死者であると考えられる。なぜなら書簡の最後の文章で、娘を苦しめる可能性のある存在として、⁽³⁷⁾ 男女の死者が挙げられているからである。

このことは、同時に、生者の苦痛の責任が、同じ生者よりもむしろ死者にあるとする考え方が一般的であったことを暗示しているように思われる。事実、生者による不当行為に言及したいいくつかの書簡は、こうした考え方をより明白に示している。まず、未亡人イルティ (⁽³⁸⁾ 'Irti) が、その子、イイ (⁽³⁹⁾ 'Iy) との連名で、亡き夫、セアンク・ネ・プタハ (⁽⁴⁰⁾ S'nh-n-Pth) に宛てて書いた、第6王朝時代の書簡には、次のような記述が見られる。

「これは、⁽⁴¹⁾ 私があなたのそばにすわり、イルティの子、イイを、⁽⁴²⁾ ベヘゼティ (Bhzt) の使者に預けるために呼び出した時、⁽⁴³⁾ ベヘゼティの使者が、敷き物 (?) のところにくちようど>やって来たこと、そしてその時に、あなたが『大イイ (⁽⁴⁴⁾ 'Iy wr) への畏れのために、⁽⁴⁵⁾ 彼を守れ。この私のベッドの木は、人の息子をその財産から引き離すような者をのせているとあらば、腐ってしまうだろう。』と言ったことについての覚え書きです。しかし、ご覧ください。ワアブウト (⁽⁴⁶⁾ W'bw) が、⁽⁴⁷⁾ イゼズィ ('Izzy) と共にやって来ました。彼らは、あなたの家を荒らし、⁽⁴⁸⁾ 彼女は、イゼズィを富ませるため、その中にあるあらゆる物を持ち去りました。彼らは、イゼズィの息子を富ませることで、⁽⁴⁹⁾ あなたの息子を貧しくしようと望んでいるのです。彼女は、⁽⁵⁰⁾ イアゼト ('I3zt)、イティ ('Iti)、アン・アンキィ (⁽⁵¹⁾ 'n-nhi) を、あなたのもとかから奪い取ってしまいました。彼女は、あなたの家にあるすべての物を持ち去ったあとで、あなたに仕えるすべての召し使いを連れ去ったのです。あなたの心は、それについて冷静であり続けるのでしょうか。私は、あなたの息子がイゼズィの息子の下に置かれるのを見るよりは、⁽⁵²⁾ いっそ、あなたの前にいるこの者をあなたが、あなたのもとに連れていってくださるほうを望みます。ベヘゼティに対し、あなたの父、イイ (⁽⁵²⁾ 'Iy) を目覚めさせてください。立ち上がって、彼に対し、急いで立ち向かってくだ

さい。あなたには、あなたがベヘゼティ及び、アアイ (33i) の息子、アン・アンキィ (⁽⁵³⁾ʿn-ṇḫi) との間を裁いていただくためにここに来られたことがおわかりでしょう。彼らに対して、あなたの先祖たち、亡き兄弟たち、亡き友人たちと共に立ち上がり、ベヘゼティと、アアイの息子、アン・アンキィとを駆逐してください。あなたが、イルティの息子、イイに『息子の家、それは息子の家だ(?)。』と言いくそして>その時『先祖の家は保たれねばならない。』と言った、このことを思い出してください。あなたがあなたの父の家を再興したように、⁽⁵⁴⁾あなたの息子が、あなたの家を再興しますように。』

ここでは、イルティの亡き夫、セアンク・ネ・プタハが、生前、息子のイイを、ベヘゼティなる人物の使者に預け、イイを正当な後継者、遺産相続人としたこと、そして、それにもかかわらず、セアンク・ネ・プタハの死後、ワアブウトなる女と、その夫と思われるイゼズィが、イイの受けつぐべき遺産を奪ったことが示されている。

しかし、このような事態の責任者とされているのは、遺産を奪った張本人のワアブウトとイゼズィではなく、ベヘゼティと、アアイの息子のアン・アンキィという2人の人物である。ベヘゼティについては、文面から、生前のセアンク・ネ・プタハによってイイの後見人とされた人物であることが察しられ、⁽⁵⁵⁾その名が、死者を示す決定詞を伴っている例が見られることから、この書簡が書かれた時、すでに故人となっていたと考えられる。⁽⁵⁶⁾一方、アン・アンキィについては、アアイという人物の息子であること以外、何も記されていないが、⁽⁵⁷⁾彼もまた、ベヘゼティと同様、すでに死亡していたことは、彼及びベヘゼティが、死者であるセアンク・ネ・プタハ「との間を裁いていただく」という、来世に⁽⁵⁸⁾おける法廷での係争を暗示する表現により示される。⁽⁵⁹⁾

ベヘゼティが責任者の1人とされた理由は、おそらく、イイの後見人として、その財産が奪われるのを阻止し得なかったことであろうと思われるが、アン・アンキィが、なぜ檜玉に挙げられたのかは明確でない。いずれにせよ、ここでは、生者の行なった行為について、死者にその責任が問われており、書簡の受信人たる死者は、生者にはなく、生者の行なった行為の責任を負う死者に対抗するよう求められているのである。

このような状況は、第1中間期にシェプスィ (Špsī) なる人物が、その亡父、イイ・ネケン・ムウト (ʿIy-ṇḫn-mwt) と亡母、イイ (ʿIy) とに、それぞれ宛てた2通の書簡でも示されている。いずれの書簡でも、シェプスィと生前の両親

との良好な関係を両親に想起させるためのくだりの後、⁽⁶⁰⁾シェプスィの亡き兄弟に関する記述が続いており、亡父宛ての書簡には、次のように記されている。

「このあなたの息子が＜悪いことを＞何もせず言ってもいないのに、私は、あなたの面前で、私の兄弟によって傷つけられるのですか。私は、彼を……⁽⁶¹⁾から運んだ後、埋葬しました。彼が⁽⁶²⁾30（？）ヘカトの上エジプト大麦、⁽⁶³⁾腰布、⁽⁶⁴⁾メヌウ、⁽⁶⁵⁾6ヘカトの上エジプト大麦、⁽⁶⁶⁾亜麻、⁽⁶⁷⁾アラバスター容器、⁽⁶⁸⁾メヘト杯を、私から借りたままであり、彼が私に対し、行なわれるべきでないことをやったにもかかわらず、私は、彼を、彼の墓地の隣人たちの間に置いたのです。あなたが、このあなたの息子に、『私の全財産は、我が息子シェプスィのものである。』と言ってくださったのだから、彼は、このあなたの息子に対して、非常に不当な仕打ちをしたこととなります。ご覧ください、私の農地が、⁽⁶⁹⁾シェリ（Šri）の息子、ヘヌウ（Hnw）によって奪われました。ご覧ください、⁽⁷⁰⁾彼は、あなたと共に唯一の町にいます。⁽⁷¹⁾彼に対して訴訟を起こしてください。」⁽⁷²⁾

さらに亡母宛ての書簡には、このシェプスィの亡き兄弟の名、セベク・ヘテプ（Sbk-htp）⁽⁷³⁾を含む次のような記述が見られる。

「私は、あなたの面前で傷つけられるのですか。子供たちは失望し、このあなたの息子は苦しんでいるのです。⁽⁷⁴⁾それでは、いったい誰が、あなたのために＜供養の＞水を注ぐことになるのでしょうか。どうか、私とセベク・ヘテプとの間を裁いてくださいますように。私は彼を他の町から運び、そして彼は、彼の町に、彼の墓地の隣人たちの間に置かれることになったのです。⁽⁷⁵⁾私は、彼に衣服と墓坑とを与えました。私が何も＜悪いことを＞言わず、やってもいないのに、なぜ彼は、このあなたの息子に対して、ひどく不当な振舞をするのでしょうか。」⁽⁷⁶⁾

この2つの書簡から、シェプスィがヘヌウなる人物に農地を奪われ、それを自分の亡き兄弟、セベク・ヘテプの悪意によってひき起こされたものと考えていることがうかがえる。彼は、自分がこのセベク・ヘテプに貸しがあり、彼のため何らかの被害を被ったにもかかわらず、その埋葬の世話をしたのだから、セベク・ヘテプに悪意を持たれるいわれはないとし、亡き両親に、来世の法廷での訴訟と助力を依頼している。しかし、なぜ死者セベク・ヘテプが、生者ヘヌウの行為に責任ありとされたかについては明確でない。

いずれにせよ、訴訟の場が現世の法廷ではなく来世の法廷であり、死者に対して訴訟の依頼がされていることは、これらの書簡に記された不当行為に対し

て、被害を受けた生者が、現世においては有効に対処できなかったことを暗示していると言える。不当行為を行なったとされている人々は、実は債権者などとして正当な権利を行使しているにすぎないのかもしれないのである。

生者が独力で解決できなかった問題という点で、これらの他の生者の行為による被害は、病氣、悪夢など不快な出来事と共通している。そのような、現世において原因を見出せず解決のできない事柄に関して、生者は、来世にその原因と解決手段、あるいは報復手段を見出そうとしたのであろう。それゆえ死者は、一方では、生者の被る被害の原因を説明するものとして一方的に利用される立場にあったのであり、他方では、苦しむ生者の近親者として、来世に存在する生者の苦痛の原因をとり除く役割を委ねられていたのである。

しかし、亡き近親者たちは、遺族にとって常に友好的な存在であるとは限らなかった。それは、自分の亡き兄弟セベク・ヘテブを糾弾したシェプスイの書簡によって示されており、⁽⁷⁴⁾ また、夫から亡き妻に宛てた第11王朝時代の書簡の次のような記述からも知ることができる。

「おまえは私に対して何の不満もなく、ここに<すなわち>⁽⁷⁵⁾永遠の町に連れてこられた。もしこれらの苦しみが、おまえが知ってのうえでひき起こされているというのなら、見なさい。おまえの子供たちが、苦しみを味わいながら、家を守っているのだよ。もしくそれらが>おまえ<の意志>に関係なくひき起こされているというのなら、おまえの父親が墓地〔の中で〕強い力を持っている。もし、非難の心がおまえの身体の中にあるのなら、おまえの子供たちのために、それを忘れなさい。寛大でありなさい。ティニス州の神々がおまえに対し寛大にしてくださるよう、寛大でありなさい。」⁽⁷⁶⁾

この書簡の筆者が、自分とその子供たちが味わっている何らかの苦痛の責任者として、書簡の受信人である亡き妻を疑っていることは明白である。妻が関与していない可能性も考えにいれ、その場合は、筆者を助けるために彼女の亡き父親の協力を得るよう示唆してはいるものの、寛大に振る舞うよう願った最後のくだりに示されるように、筆者は、亡き妻の関与についてほぼ確信を持っているように思われる。もっぱら子供たちの苦しみを思い彼らのために恨みを忘れるよう彼女に願ったくだりは、彼女が何の不満も持っていないとする初めの記述にもかかわらず、筆者の側に、亡き妻に恨まれるようなおぼえのあったことを暗示している。

また、同じく夫から亡き妻に宛てた、第19王朝時代の書簡は、⁽⁷⁷⁾ 生者の苦しみ

の責任をもっぱら書簡を受ける側の亡き近親者に負わせているという点で、より徹底している。この書簡は、横書きで38行に及ぶ長大なものであり、筆者は、その中で、自分がいかに生前の妻を愛し尊重したか、そして彼女が病氣にかかった時には最高の医者に見せ、彼女が死んだ時、いかに嘆き悲しんだかを綿々と訴えている。さらに、その後も彼女のために独身を通すことまでしているにもかかわらず不当にも自分を苦しめる亡妻に対し、次のような非難と脅しの言葉を投げつけている。

「私が今のこのみじめな身の上とならねばならないような、どんな悪いことをおまえに対してやったというのか。私がいったいおまえに対して何をやったというのか。おまえがやったことはといえば、私がおまえに対して何も悪いことをしていないのに、私を攻撃するということだ。」⁽⁸²⁾

「私は、私自らが語る言葉によって、西方の九柱神の御前で、おまえに対する訴えを起こすであろう。おまえと、この書簡、書かれてあること〔に関しておまえ〕と論争するこれ(?)との間で裁きがなされるであろう。」⁽⁸³⁾

「しかし、おまえは私の心に楽しみを与えてくれない。私は、おまえと共に裁きを受けるだろう。そして善悪の区別がつけられるだろう。」⁽⁸⁴⁾

ここで筆者は、自分が死後に西方すなわち来世の神々の前で亡妻に対する訴えを起こすことによって、彼女に報復しようと考えているのである。筆者の苦しみが何であったのか、彼が、なぜ他の死者でなく、愛してやまなかった亡き妻を、自分の苦しみをひき起こした者と考えたのかは明記されていない。しかし、筆者の語り口は、前述の第11王朝時代の書簡のそれに比較して高圧的であり、筆者が、亡き妻のため尽くしている以上、彼女によって苦しめられるいわれはないとする考えを持っていると推察できる。

III

「死者への書簡」の、現世における問題や不正の解決を死者に求めようとする傾向は、第5王朝時代末の教訓文学「プタハ・ヘテプの教訓」において初めて見られる、現世の裁きに絶対の信を置かず、真の正義は来世において達成されるとする考え方を、ある程度反映していると思われる。いくつかの書簡の来世における審判への言及は、そうした考え方を示す典型的な例と言えるだろう。⁽⁸⁸⁾
⁽⁸⁹⁾

しかし、「死者への書簡」において生者が死者に対して示す態度は、生者の側からの一方的な責任転嫁と言うべきものである。死者は、生者にとってたと

え近親者であろうと、往々にして生者の苦痛の責任者とされ、現世において解決策や原因の見出せない不幸な事態を説明するものとして利用されたのである。

また、生者にとって、その近親者は、生前と同様、死後においても、当然の如く、その援助を期待できる存在であった。未亡人デディが、病気の女召し使いを放置している亡き夫に投げつけた非難めいた言葉⁽⁹⁰⁾、そして遺児の病気に無関心な亡き夫、ティ・セネブに対する、未亡人の「ご自分のことについてだけ、賢明」だという皮肉などは、このような、近親者たるもの、たとえ来世にあらうとも、現世に残った遺族のことを思ってくれてしかるべきだとする考え方を良く示している。

しかし一方で、死者が現世の遺族を忘れがちとなり、その苦難に対して救いの手を差しのべようとしないかもしれないという懸念が、生者の側に存在していたことも確かである。書簡の受信人である亡き近親者に、遺族と生前に結んでいた良好な関係を思い起こさせるくんだりや、発信人側の無実を主張し、あるいは近親者としての情に訴えるくんだりなどは、こうした懸念を良く示している。

しかし、生者が、亡き近親者の助けを得るために用いた手段は、そのような情緒的なものばかりではない。たとえば、メル・イルティ・フィ (Mr-irty-fy) なる人物が、亡き妻ネプト・イト・フ (Nbt-it-f) に宛てた、第1中間期の書簡には、次のように記されている。

「さて、私は、地上では、おまえにとって最愛の人間だったのだから、私のために戦い、私の名のためにとりなしておくれ。私は、地上でおまえの名を永遠のものとした時、おまえの前で〔祈りの言葉〕をごまかしたことはない。私の身体の病気をとり除いておくれ。おまえが私のために戦っているのを夢に見られるように、どうか私の目〔の前で〕私のために霊となしておくれ。＜そうすれば＞私は、陽がのぼったら〔すぐに〕おまえに供物をそなえ、おまえのために、おまえの供物台をしつらえよう。」⁽⁹⁵⁾

ここでは、筆者は、亡き妻に病気を治してもらい夢枕に立ってもらうために、その返礼として供物と供物台を与えることを約束している。このような一種のギブ・アンド・テイクの関係は、他の書簡の、「人が死者の魂のために供物をささげるのは、生者への助けを得るため」だというくだりにも示されている。

しかし、この、死者からの援助と引き換えに、生者からの供物が与えられるという考え方は、必ずしも生者と死者のまったく対等な関係を表わすものではない。死者は、たとえすでに来世に住み、現世における自分の遺体や墳墓の運

命に無関係でいられる⁽⁹⁸⁾としても、やはり、自分の供養を生者に依存しているという点で、生者に対して受身の存在とならざるを得なかった。少なくとも当時の生者の側にそのような意識の働いていたことは、シェプスィが亡き母に宛てて記した書簡の中の、彼と彼の子供たちが亡き母の助力を受けられず苦しむのなら「それでは、いったい誰が、あなたのためにく供養のく水を注ぐことになるのでしょうか。」というくだりなどによって暗示されている。死者は、供養を受けるためには、その遺族を助けざるを得なかったのである。

第1中間期の書簡の中に、死者に対して来世における審判者となってくれるよう依頼した例のあることは、その時期に起こったとされる、王ばかりでなく一般人も死後に、来世の審判を主宰するオシリス神となり得るという、いわゆる「葬祭観の民主化」⁽¹⁰⁰⁾の影響を示すものと言えるが、そのような変化は、「死者への書簡」に表わされた生者から見た死者の性格を、根本的に変えることはなかった。「死者への書簡」には、現世の不幸を説明するものとしてであれ、苦しむ生者を助ける存在としてであれ、常に、生者に利用され、生者のために働くべき存在としての死者の姿が表わされているのである。

注

- (1) cf. Gardiner, A. H., and K. Sethe, *Egyptian Letters to the Dead*, London, 1928, pp. 9~12.
- (2) cf. *Lexikon der Ägyptologie* I, Wiesbaden 1972-75, 864~870.
- (3) Gardiner と Sethe が1928年に出版した7通 (Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. I~VIII, pls. IA~VIA, cf. pp. 1~25) に加え, Gardiner, A. H., "A New Letter to the Dead", *Journal of Egyptian Archaeology* (*JEA* と略す。) 16 (1930), pl. X, figs. 1~3, pp. 19~20, cf. pp. 19~22; Clère, J. J., and A. Piankoff, "A Letter to the Dead on a Bowl in the Lourve", *JEA* 20 (1934), pls. XX~XXI, cf. pp. 157~169; Černý, J., and A. H. Gardiner, *Hieratic Ostraca*, Vol. I, Oxford, 1957, pls. LXXX, LXXX A; Simpson, W. K., "The Letter to the Dead from the Tomb of Meru (N 3737) at Nag' ed-Deir", *JEA* 52 (1966) pls. IX, IXA, cf. pp. 39~52 (Simpson, *JEA* 52 と略す。); Simpson, W. K., "A Late Old Kingdom Letter to the Dead from Nag' ed-Deir N 3500", *JEA* 56 (1970) pls. XLVI, XLVI A, cf. pp. 58~64 (Simpson, *JEA* 56 と略す。) により各1通, Wentz, E. F., "A Misplaced Letter to the Dead", *Orientalia Lovaniensia Periodica* 6-7 (1975/76), p. 596, cf. p. 595, pp. 597~600 により2通が出版されている。個別の書簡の研究としてこの他, Fecht, V. G., "Der Totenbrief von Nag' ed-Deir", *Mitteilungen des deutschen archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 24 (1969) SS. 105~128; Goedicke, H., "The Letter to the Dead, Nag' ed-Deir N 3500", *JEA* 58 (1972), pp. 95-98 などがある。

- (4) Gardiner, and Sethe, op. cit., pp. 9~12.
- (5) Guilmet, M., “Les Letters aux Morts dans l’Égypte ancienne”, *Revue de l’Histoire des Religions* 170 (1966) pp. 1~27.
- (6) そのような問題点の多くは、ガン (Gunn, B.) による書評 (Gunn, B., *JEA* 16 (1930), pp. 147~155) で指摘されている。
- (7) 彼は、さらに、中王国時代に属する女性像に記された出産祈願の銘文 (Schott, S., “Die Bitte um ein Kind auf einer Grabfigur des frühen Mittleren Reiches”, *JEA* 16 (1930), Taf. X, Abb. 4, S. 23) を「死者への書簡」に加えている (Guilmet, op. cit., pp. 18~19) が、この銘文は、1行のみで成っている点など、他の書簡と、形式上、異なっており、「死者への書簡」に含まれ得るかどうかは疑問である。
- (8) たとえば彼は、ガンの書評 (注(6)参照。)にまったく言及していない。
- (9) 注(77)参照。
- (10) Wente, op. cit., p. 596, l. 7.
- (11) Gardiner, op. cit., p. 19 (4), p. 20 (8) a.
- (12) dt, cf. Simpson, *JEA* 52, p. 48, n. 4.
- (13) m^w(3) n-k, cf. Fecht, op. cit., SS. 122~126; Doret, E., “Review of *Interrogative Constructions with JN and JN-JW in Old and Middle Egyptian*, by David P. Silverman”, *Journal of Near Eastern Studies* 45 (1986), p. 79. この表現は、死者の供養をする遺族を指すものと思われる。
- (14) 破損部分。
- (15) Simpson, *JEA* 52, pls. IX, IXA, ll. 2~6; cf. Gilula, M., “Negative sentences in a Letter to the Dead”, *JEA* 55 (1969), p. 217; Fecht, op. cit., S. 112; Simpson, *JEA* 56, p. 62. 訳文中の〔 〕に囲まれた部分は破損部分の復元を示し、以下の訳文でも同様とする。
- (16) Simpson, *JEA* 52, p. 45.
- (17) この「彼」を夢に見る「私」は文中では, b3k im「ここにおります従者」と記されており、それゆえ「セニ」と同様、「彼」によって示され得る。b3k im については, cf. Faulkner, R. O., *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford, 1962, p. 79.
- (18) Gardiner, op. cit., p. 19, (5)~(6).
- (19) cf. Gunn, op. cit., p. 152; Silverman, D. P., *Interrogative Constructions with JN and JN-JW in Old and Middle Egyptian*, Malibu, 1980, p. 65, Ex. 2.
- (20) cf. Silverman, *ibid.*
- (21) cf. Gunn, op. cit., p. 152.
- (22) cf. Silverman, op. cit., pp. 16~17, Ex. 4.
- (23) Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. VI, VIA, ll. 2~10, cf. Gunn, op. cit., p. 152. 訳文中の< >に囲まれた部分は意味を明確にするための補足を示し、以下の訳文でも同様とする。
- (24) ヘテプ・ネブ・イを受信人の父とする読み方については, cf. Goedicke, op. cit., p. 95, n. a. 受信人テティ・セネブの名のテティ (Tty) の部分は、王名を示すカルトゥーシュで囲まれている (cf. Simpson, *JEA* 56, pl. XLVI) が、ゲーディツケ (Goe-

- dicke, H.) は、カルトウーシュの中に Tti の代わりに Tty が使われた例がないとし、受信人の名をペピィ・セネブ (Ppy-snb) としている。Goedicke, *ibid.*, n. 2. しかし、彼が p と読んだ原文のヒエラティック (cf. Simpson, *ibid.*) は、t のそれである。cf. Möller, G., *Hieratische Paläographie*, Bd. I, Leipzig 1927, S. 55, 575; Simpson, *ibid.*, p. 64. また、王名として Tty を用いた例が存在する。cf. Beckerath, J. V., *Handbuch der ägyptischen Königsnamen*, München, Berlin 1984, S. 184, 1, E3. 以上の点から受信人の名は、Simpson, *ibid.*, p. 59 のとおり、テティ・セネブであると思われる。
- (25) iww, cf. Goedicke, *ibid.*, n. b.
- (26) cf. Silverman, *op. cit.*, p. 10, Ex. 16 (=p. 91, Ex. 5).
- (27) 2人称双数形代名詞 -tny (cf. Simpson, *JEA* 56, pp. 59~62). 受信人テティ・セネブの他に、その父ヘテプ・ネブ・イが念頭に置かれているのであろう。他の解釈については、cf. Goedicke, *op. cit.*, pp. 95~96, p. 98.
- (28) i. e. 来世。
- (29) cf. Silverman, *op. cit.*, p. 10, Ex. 16 (=p. 91, Ex. 5).
- (30) Simpson, *JEA* 56, pls. XLVI, XLVIA, cf. Goedicke, *op. cit.*, p. 97, n. g., n. 8.
- (31) mwt, 女性形 mwtt. 死者を示す一般的用語。cf. Faulkner, *op. cit.*, p. 120; Simpson, *ibid.*, p. 60, n. h. ゲーディッケは、病気をひき起こす「魔物」と解釈している (Goedicke, *ibid.*, p. 97, n. g.) が、「死者への書簡」の中には、発信人が、受信人たる死者に対して、「我が mwt, mwtt のうちで最も讃えられる者としてふるまうよう」求めた表現を含むものが見出せる。Clère, and Piankoff, *op. cit.*, p. 158 [16]. ここの「我が mwt, mwtt」は、発信人の物故した親族を指すと考えるのが自然であり、このことは、mwt, mwtt が死者を意味することを示している。
- (32) irr-t(w) prt-hrw n 3h hr sbt hr tpy-t3. これは独立した文章で (cf. Gunn, *op. cit.*, p. 151), 動詞の形 (irr) は強調形であり、ここでは、死者に供物をささげるという行為が、何のために行なわれるのかを強調している。強調形については、cf. Polotsky, H. J., “Ägyptische Verbalformen und ihre Vokalisation”, *Orientalia* 33 (1964), SS. 276~277; Polotsky, H. J., *Egyptian Tenses*, Jerusalem, 1965, pp. 7~10; Silverman, D. P., “An Emphasized Direct Object of a Nominal Verb in Middle Egyptian”, *Orientalia* 49 (1980), p. 200, n. 6.
- (33) lit. 「あなたの仕事をしてください。」cf. Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, p. 20.
- (34) *ibid.*, pls. IV, IVA, ll. 2~6, cf. Gunn, *op. cit.*, pp. 151~152.
- (35) Gunn, *ibid.*, p. 152. 未亡人及びその娘の苦痛が、遺産の横領によってひき起こされたものとする解釈 (Gardiner, and Sethe, *ibid.*, p. 5; Guilmoit, *op. cit.*, pp. 13~14) には根拠がない。
- (36) Gunn, *ibid.*, p. 152.
- (37) 注(31)参照。
- (38) 書簡の最初に、受信人に対してその妻と子が呼びかけていることを示す部分がある。Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, pls. I, IA, l. 1. ただし、文面は、イイによって付記された1行 (*ibid.*, l. 13) を除き、イルティによって記されている。
- (39) i. e. イルティ。

- (40) このベヘゼティの名 (Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. I, IA, l. 3) は, 死者を示す決定詞を伴っている。cf. *ibid.*, p. 3. 同じ決定詞は, 受信人であるセアंक・ネ・プタハと, その父, イイの名など他の死者を示す表現にも見られる。ibid., pls. I, IA, ll. 1, 9, 11, 13, cf. p. 3.
- (41) sb3kꜥ, cf. Faulkner, op. cit., p. 220.
- (42) msk3, lit. (動物の) 皮。cf. *ibid.*, p. 118.
- (43) 「イルティの子, イイ」の祖父。cf. Gardiner, and Sethe, op. cit., pp. 1~2.
- (44) i. e. イルティの子, イイ。
- (45) cf. Gunn, op. cit., p. 149.
- (46) 女性の名であることを示す決定詞 (Gardiner, A. H., *Egyptian Grammar*, 3rd ed., London, 1957, p. 448, B 1) を持つ。cf. Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. I, I A, l. 4.
- (47) 男性の名であり, ワアブウトの夫と考えられる。cf. Gardiner, and Sethe, *ibid.*, pls. I, I A, ll. 5, 6, 9, p. 2.
- (48) i. e. ワアブウト。
- (49) この3人の名は, いずれも女性を示す決定詞 (注(46)参照。)を持っており, ワアブウトによって連れ去られた女中の名を示すものと思われる。cf. Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. I, I A, l. 6, p. 15.
- (50) i. e. イルティの子, イイ。cf. Gunn, op. cit., p. 149.
- (51) i. e. 「来世に連れていく」すなわち「死なせる」。cf. Gardiner, and Sethe, op. cit., p. 2.
- (52) 「大イイ」。注(43)参照。死者を示す決定詞を持つ。注(40)参照。
- (53) 「先祖たち」(ityw)「兄弟たち」(snw)「友人たち」(hnmw) のすべてに, 死者を示す決定詞が伴っている。Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. I, I A, l. 11. 注(40)参照。
- (54) Gardiner, and Sethe, *ibid.*, pls. I, I A, ll. 2~12, cf. Gunn, op. cit., pp. 148~150.
- (55) Gardiner, and Sethe, *ibid.*, p. 3.
- (56) 注(40)参照。cf. Gunn, op. cit., p. 150.
- (57) イルティの子, イイによる付記の部分 (Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. I, I A, l. 13) には, 「ワアブウトの子, アン・アンキ」の名が見出せるが, 「アアイの子, アン・アンキ」と同一人物かどうかは明確でない。
- (58) wdꜥ mdw hnꜥ, cf. Edel, E., “Untersuchungen zur Phraseologie der ägyptischen Inschriften des Alten Reiches”, *Mitteilungen des deutschen Instituts für ägyptische Altertumskunde in Kairo* 13 (1944), § 12.
- (59) Edel, *ibid.*; 拙稿「古王国時代における私人墓浮彫に対する破壊行為について——墓荒らしの一側面——」早稲田大学大学院「文学研究科紀要別冊第12集」哲学・史学編1985年, 231~232頁。
- (60) 父親と共に食事をしたこと (Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. II, IIA, ll. 2~4), 母親のため食物を用意したこと (ibid., pls. III, IIIA, ll. 2~3) が, それぞれ記

されている。

- (61) 破損部分。cf. Gardiner, and Sethe, *ibid.*, p. 17.
- (62) 他の土地で死んだ者の遺体を故郷に持ち帰って埋葬する行為を示すと思われる。
cf. Sethe, K., *Urkunden des Alten Reichs*, 2. Aufl., Leipzig 1933, S. 134, z. 13 ff., S. 135 ff.
- (63) ḥꜣt, 1ヘカトは4.54リットル。cf. Faulkner, *op. cit.*, p. 178.
- (64) 意味不明。cf. Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, p. 18.
- (65) šs, cf. Faulkner, *op. cit.*, p. 270. 異なる解釈については, cf. Gunn, *op. cit.*, p. 151.
- (66) 書簡の前半で非難の対象となっているのがシェプスイの亡き兄弟であることなどから, この「彼」は, ヘヌウではなく, この兄弟を指していると考えられる。cf. Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, p. 4.
- (67) i. e. 来世。注(16)参照。
- (68) Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, pls. II, IIA, ll. 4~9.
- (69) cf. *ibid.*, p. 4.
- (70) cf. *ibid.*, p. 25, Postscripta.
- (71) cf. Gunn, *op. cit.*, p. 151; 注(62)参照。
- (72) ḥꜣt, cf. Edel, E., *Hieroglyphische Inschriften des Alten Reiches*, Opladen 1981, S. 20.
- (73) Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, pls. III, IIIA, ll. 3~5.
- (74) 注(68)(73)参照。
- (75) niwt nt nhꜣ, 「墓地」を指す。cf. Faulkner, *op. cit.*, p. 137.
- (76) Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, pls. V, VA, ll. 1~2.
- (77) *ibid.*, pls. VII, VIII, cf. Gunn, *op. cit.*, p. 153.
- (78) *ibid.*, pl. VII, ll. 8~17, pl. VIII, ll. 18~26.
- (79) *ibid.*, pl. VIII, ll. 27~29.
- (80) *ibid.*, pl. VIII, ll. 31~35.
- (81) *ibid.*, pl. VIII, ll. 35~37.
- (82) *ibid.*, pl. VII, ll. 1~3, cf. ll. 3~5.
- (83) i. e. この書簡。cf. Gunn, *op. cit.*, p. 153.
- (84) Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, pl. VII, ll. 6~8.
- (85) *ibid.*, pl. VII, ll. 13~14, cf. pl. VIII, ll. 37~38.
- (86) あるいは, 他の亡き近親者に, 来世の法廷で亡妻に対する訴訟を起こしてもらうよう依頼することを意味するのかもしれない。cf. Clère, and Piankoff, *op. cit.*, p. 158 [17] [18], pp. 165~166.
- (87) 注(76)参照。
- (88) Morenz, S., *Egyptian Religion* (tr. by A. E. Keep), Ithaca, 1973, pp. 127~128.
- (89) Gardiner, and Sethe, *op. cit.*, pls. I, IA, ll. 9~11 (注(54)参照。), pls. II, IIA, ll. 8~9 (注(68)参照。), pls. III, IIIA, l. 4 (注(73)参照。), pl. VII, ll. 6~8, ll. 13~14 (注(83)(85)参照。); Clère, and Piankoff, *op. cit.*, p. 158 [17] [18] (注(86)参照。)) ここでの審判は死者が死者を訴えるものであり, 古王国時代の墳墓碑文

- に言及されている審判（注(58)(59)参照。）と同じ性格を持ち、第1中間期以降に一般的となる、すべての死者が受けねばならない「死者の審判」とは異なる。拙稿 op. cit. 236 頁の註(66)参照。
- (90) 注(19)(20)参照。
- (91) 注(29)参照。
- (92) 注(60)参照。この他, cf. Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. I, IA, ll. 2~4, l. 12 (注(54)参照。); Wente, op. cit., p. 596, l. 2 (注(95)参照。).
- (93) cf. Simpson, *JEA* 52, pls. IX, IXA, ll. 3~5 (注(15)参照。); Gardiner, and Sethe, *ibid.*, pls. IV, IVA, l. 3, ll. 5~6 (注(34)参照。); *ibid.*, pls. II, IIA, ll. 4~6 (注(68)参照。); *ibid.*, pls. III, IIIA, ll. 4~5 (注(73)参照。).
- (94) 注(76)参照。
- (95) Wente, op. cit., p. 596, ll. 2~5.
- (96) 注(32)参照。
- (97) この他, cf. Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. VI, VIA, ll. 5~6 (注(23)参照。); Černý, and Gardiner, op. cit., pls. LXXX, LXXXA, verso, ll. 18~19.
- (98) 拙稿 op. cit. 232頁。
- (99) Gardiner, and Sethe, op. cit., pls. III, IIIA, l. 4 (注(73)参照。).
- (100) 注(73)参照。
- (101) cf. David, A. R., *The Ancient Egyptians*, London, 1982, pp. 105-112.